

千葉大学法経学部教授

広井

HIROI
Yoshinori良典
さんに伺いました

聞き手

武居 秀訓
編集委員[writer] 駒崎 文男
[photo] 永田 正男

社会保障、医療、環境、都市などに関する政策研究に取り組まれてきた
 広井良典教授に、低成長時代における土木の役割についてお話を伺った。

2010年9月6日(月)
 土木学会役員会議室

真の豊かさを実現する 定常型社会へ

—— 広井先生は高度成長期後の成熟型社会を「定常型社会」と呼んでいます。それはどのような社会なのでしょうか。

広井—— 2001年に『定常型社会——新しい「豊かさ」の構想』(岩波新書)という本を出しました。戦後の日本は、経済成長をすべての目標にして駆け抜けてきました。しかし、モノがあふれる時代になり、果たして経済成長だけが唯一の目標だろうか、それで幸せになれるのだろうかかと誰しもが感じるようになっていました。これまでのように経済成長がすべての問題を解決するという発想を転換し、定常型社会を世の中のコンセンサスにしていくことで、本当

の意味での豊かさを実現していけるのではないかと考えています。

よく定常型社会に対する疑問として、進歩の終わった退屈な社会ではないかという批判があります。しかし、音楽CDの総売上げがフラットになり定常化しても、ヒットチャートはほとんど変わっていくように、量的な拡大はなくなっても、質的な変化というのはどんどん起こっていきます。ですから、定常型社会は、進歩の止まった退屈な社会ということではまったくなくということなのです。

一極集中や多極分散ではない 多極集中

—— 定常型社会の中で、都市や地域のあり方はどうなるのでしょうか。

広井—— 人口減少社会の中で、地方では限界集落の話が生じていますし、都会でも団地での

高齢化や中心部での空洞化など都市型限界集落と呼ぶべき状況が起きています。そうしたなかで、これから人はどこに住み、どんな生活を送るのか。都市と地域はどうなるのかは大きなテーマであると思っています。そこで、私が定常型社会で考えているのが、「多極集中」という方向です。

多極集中というのは、一極集中でも、多極分散でもない姿ということです。東京への一極集中ではないということでは多極化していくわけですが、単に分散していくというものではありません。コンパクトシティのように、地域ごとに極になるような集約的なまちがあり、多極化しつつ集中するような都市や地域のあり方です。そこでは、道路中心でまちが拡散していくような姿ではなく、中心部に商店街もあり、お年寄りを含めて、できるだけ歩いて買い物ができる、楽しめる。そういう姿を実現していくことを考えています。

三つの土木の方向性を考えたい

——人口減少や地球環境など、さまざまな問題を抱える日本社会において、持続可能な活力ある社会を実現するために、土木にはどのような役割が求められているのでしょうか。

広井——私としては、「定常型土木」、「クリエイティブ土木」、「コミュニティ土木」という三つの方向が重要ではないかと思っています。「定常型土木」というのは、従来の経済成長に向けての土木ではなく、定常型社会を実現していくための土木ということです。たとえば持続可能な社会ということでは、自然や歴史的なまち並みの保全やメンテナンスが重要になって

きます。生産志向のための土木よりも、そういった生活者や生活の豊かさの実現を目指します。

「クリエイティブ土木」ということでは、さまざまな可能性があると思っています。アメリカの都市経済学者のリチャード・フロリダは『クリエイティブ資本論』（ダイヤモンド社 2008年）の中で、これからの資本主義を引っ張っていくのは、デザインや文化、アートなど創造性を中心とする分野であり、同時にコミュニティや場所といったことが重要になると述べています。もともと「土木」という中国語の語源には、文化や歴史、思想、宗教性が強く結びついていると思われまます。ユネスコの創設に活躍したイギ

リス人で、中国科学史で有名なジョセフ・ニーダムが残した名言の一つに『中国の橋はすべて美しい』という言葉があります。橋とは機能として人が渡ればよいというものではなく、デザイン性や造形的な美しさもあります。そういった土木のあり方が大切になってくるのではないのでしょうか。

最後に「コミュニティ土木」ですが、今の日本社会で非常に重要なテーマになっているのがコミュニティです。国際比較調査では、日本は先進諸国の中で、社会的孤立度が最も高い国になっており、コミュニティをどうつくっていくかということは重要です。人びとが地域に根差し、愛着を感じられるようなコミュニティ感覚を支援するコミュニティ土木といった方向を目指して欲しいと思っています。



広井 良典(ひろい・よしのり)さん プロフィール

1986～1996年厚生省勤務。1996年千葉大学法経学部助教授。2001～2002年マサチューセッツ工科大学客員研究員。2003年千葉大学法経学部教授。2009年「コミュニティを問いなおす一つながり・都市・日本社会の未来」(ちくま新書)で第9回大佛次郎論壇賞受賞。他の著書に「定常型社会」(岩波新書)など多数。

旧通産省が1990年代に出した報告書に「社会資本整備の4つのS字カーブ」というものがあります。社会資本整備は、最初は徐々に浸透し、ある時期に急激に普及して、成熟していくというS字カーブを描きます。明治以降、社会資本整備でS字カーブを描いてきたのは、①明治の鉄道、②戦後の道路、③高度成長期後半の公園、廃棄物処理施設、高速道路、空港などでした。その時点では第4のS字カーブは見えていませんでしたが、私は、広い意味での福祉や環境、文化など、コミュニティを含めた都市や地域づくりが第4のS字カーブであると思っています。その基盤となるのは土木です。今後の土木の役割に期待しています。